

六花

り

っ

か

月刊俳句雑誌

2006

rikka haikukai
designed by masami

9月号

一



山田六甲

腹に猫のらせてゐたる寝冷えかな

夏負けの靴片方が脱げにけり

塩舐めに厨へ立ちぬ暑氣中り

雷雲の紫色に過ぎゆけり

穴ひとつ馬になりそこねし茄子^{なすび}

流灯の石に当たりて回りけり
草履からはみ出す踵盆踊り
水に置く露草流れはじめたり
梨を拭く首にかけたるタオルもて
残暑かな気合ひを入れて風呂に入る
炎天下字を書くときは口つむり
青鷺の畳み込ままるる秋扇

花

筵

青き踏む雪の光碎きつつ
春の雪あらもう晴れてしまひけり
朽ちかけし橋より花へ手を伸べる
雛灯り肩抱いてゐる己が腕
春愁しゅんしゅうの手をたあいなく握らるる
櫂先かいさきに落花らつか逆卷さかきつつ浮うき来く
とけさうに牡丹の咲ける夕べかな
酔うた手に吸ひついて来し花筵はなむしろ
踏まれては透きとほりゆく落花かな
春の水野太く鯉の泳ぎたる

水 ま く ら

レイコーで待てよせかすな俺も俳人
フラッペを何処から食べる下からか
氷一個水まくらの水もつとほし
かき氷果汁に薄めのにほひして
真四角なアイスクャンディ妻かたし

※レイコー(冷珈琲)

堺の俳人達が見に吟行したので紹介してくれと依頼があった。十年昔に奈良と和歌山の県境にある近畿で一番高い山、私も何回か登ったこともある。その山も川の一部も庭内に取り込み一万坪を超す庭を有する天光園。猪・熊・鹿・雉子それに牛肉のまじえてのバーベキューを堪能した。時期もちょうど螢の季節だったので螢も見た。俳句の材料もいろいろあるし主人が俳句好き、有名な俳人の色紙を集めているのでそれも楽しみみたい。隣家は温泉、これもよければ楽しめる。

蝮酒妻を大蛇おろちに育てけり

貝森 光大

恐々と一升瓶の蝮酒

おもむろに手足舞い出す蝮酒

ときおりは舌も覗かせ蝮酒

蝮酒妻に飲ませて天仰ぐ

蝮酒を飲んだ妻は大虎ではなく大蛇になった、というのが面白い。今までの経過を想像させるからだ。例えば虚弱体質だったから蝮酒を奨めたのに、いつの間にか元気になりすぎて困っているというようなことを。作者はよく奥さまをダシに句を作る。だからといって事実かどうかとどうもあやしい。俳句は創作をしてはいけないということではなく、読者は作品そのものを楽しめば良い。

虫の音の押しよせて来て夢に入る

田尻勝子

斑猫はいつたどこまで道案内

台風を追ひ越して来て信濃かな

死ぬる瞬流星の謎とけるかな

紋黄蝶てふてふてふと野に満つる

虫集く状態の中にまどろんでいたが、いつのまにか眠りに落ちて虫の鳴き声は夢の中に入り込んだという。現実ではないが、そういうこともあり得るといふ感じを読者に与える力をこの句は持っている。「押し寄せてきて」という言葉が夢の中に割り込んできたような感じを与え、「夢に入る」という今までに誰もが掴み取れなかった表現をあつげらんと俳句に詠み込めたのは凄い。格調も高い。

蝮酒

貝森 光大

蝮酒妻を大蛇おろちに育てけり
 恐々と一升瓶の蝮酒
 おもむろに手足舞い出す蝮酒
 ときおりは舌も覗かせ蝮酒
 蝮酒妻に飲ませて天仰ぐ

五位鷺

水谷ひさ江

膝抱いてながめてゐたる螢の火
 螢狩手書きの地図を疑ひつ
 闇に目のなれる間のなし螢の火
 あの闇に誰かあるやも螢狩
 五位鷺の脚ぬらすかに青田波

檀木集

目高

K O K I A

翅音を立てて簾を上る蜂
まどろみてゐるかに薔薇の開きけり
扇風機うなるばかりの電車かな
風死すや網戸ごしなる庭の草
数へむとしたる目高の速きこと

口髭

三井 孝子

新馬鈴薯しんじやがに似し膝小僧傷ひとつ
ふところに汗の匂ひの子を迎ふ
近づきて母の昼寝を確かむる
緑蔭に母を捜せる食事時
口髭がやつと濃くなり夏帽子

退院

松本文一郎

退院の妻へ微笑み夏立つ日
退院は表口より若葉風
見送りて空港去らず春日傘
手拭で目高掬うて兄弟
遠青嶺母の背を見て育ちけり

六花集

山田六甲選

わかやぎすずめ

子燕をみつめていたる鴉かな

睡蓮のさみしく咲いておりにけり

荒梅雨や搔き消されゆく君の声

梅雨の夜や灯点さず部屋に居り

五月雨の音が心を占めゆけり

田尻 勝子

斑猫はんみょうはいつたどこまで道案内

台風を追ひ越して来て信濃かな

死ぬる瞬とぎ流星の謎とけるかな

紋黄蝶もんおうてつてふてふと野に満つる

虫の音の押しよせて来て夢に入る

永田 勇

捨つる物さがす抽斗ひきだし走り梅雨

休日きゅうじつを草刈る背中眩しめり

青空へ青田あおだ広がりゆきにけり

夏の昼もみほぐしたる臍へそ周り

紫陽花や路地を流るるはやり歌